

陸軍航空の話 (2)

荒木 肇

1932 (昭和7)年3月1日には「満洲国」の建国が発表されました。9月には「日満議定書」が調印されて満洲国の国防は、わが国が担任することになりました。国防の第一線は、満洲とソ連、あるいは外蒙古の国境線にまで広がったことになりました。そのわずか1年前までは、対ソ連の予想戦場の中心になるのはハルビン付近ですから、たいへんなことになりました。

「兵備改善案」で取り組まれたのは、飛行隊、戦車隊、高射砲隊の増強、化学戦学校の新設、その他の応急的な手当てばかりでした。化学戦学校は地名をつけた習志野学校です。1935 (昭和10)年からは、「航空防空緊急充備計画」の実行を始めます。

■昭和8年の航空拡大

ちよつと時計の針を戻します。1

925 (大正14)年には偵察、戦闘の各11個中隊、軽爆、重爆の各2個中隊の合計26個中隊が陸軍航空の全

勢力でした。それが1933 (昭和8)年には偵察12個、戦闘14個、軽爆6個、重爆4個の合計36個中隊になりました。重・軽爆の比率が上がります。

飛行聯隊の数は内地・台湾8個、1個気球隊だったものに、関東軍飛行隊 (司令部新京) として飛行第10聯隊 (偵察3個中隊・チチハル)、飛行第11聯隊 (戦闘4個中隊・ハルビン)、飛行第12聯隊 (軽、重爆各1個中隊・新京) が加わりました。爆撃が重視されてきたので爆撃専修の浜松飛行学校が創設され、少年航空兵募集が始まったのは、この昭和8年1月でした。

■昭和10年の航空廠新設

陸軍航空廠が新設されます。本廠の他に各地に支廠ができました。器材の補給修理、燃料弾薬の補給業務が増えたためです。陸軍航空技術研究所も設けられ、こうして補給・技術の両官衙が航空本部に所属することになりました。

学校も増えます。熊谷陸軍飛行学校、同航空技術学校 (現・埼玉県入間市) も開校します。軍隊では飛行団司令部が生まれました。この頃はまだ教育練成上の指導機関でした。

飛行中隊数は54個中隊に増えていますが、各師団長や軍司令官の下にあったのは前に書いた通りです。飛行聯隊は通し番号で16個になりました。

■昭和11年、新軍備充実のかけ声

この年、8月に東京に航空兵団司令部ができます。兵団司令官は天皇に直隷する高い地位をもち、内地の飛行部隊を統一指揮することになりました。帝国国防方針や用兵綱領が裁可され、兵力量も決定されます。陸軍兵力は戦時50個師団及び航空142個中隊でした。地上戦力は動員をして常設師団から次々と特設師団を生みだします。だから平時と戦時の差は大きかったのですが、航空部隊は開戦となったら即戦闘に参加ということから、この142個中隊は平時も同じです。これ以後、陸軍航空はさまざまな過程を経て、その実力を増してゆきます。

■空地分離

これまでは飛行聯隊という単位で、飛行組織と支援組織をもっていました。これを「飛行戦隊」というパイロットや空中勤務者を中心にし、わずかな整備員だけをもった飛行専門部隊と、「飛行場大隊」という地上勤

務部隊に分けたのです。1938 (昭和13)年6月のことでした。これを「空地分離」といいました。これで飛行戦隊は飛行場から飛行場へと自在に飛び回るようになります。

飛行戦隊長は大佐、もしくは中佐が指揮を執り3個中隊と本部です。戦闘機なら12機で編成され、将校6名と下士官など63名が定員でした。航空地区司令官も大・中佐が任じられ、おおよそ4個の飛行場大隊 (中・少佐) がありました。飛行場大隊は整備中隊 (整備小隊・修補小隊、190名) と警備中隊 (3個警備小隊・高射機銃小隊・高射機砲小隊、234名) になります。飛行団 (少将) は4個飛行戦隊と航空地区司令部と

いうように、飛行部隊と地上支援部隊で成りました。飛行集団 (中将) では3個飛行団と航空情報隊、航空通信聯隊がぶら下がり、飛行集団長直轄の飛行戦隊、飛行場大隊もあつたのです (昭和16年)。

■極秘の「航空部隊用法」と「航空撃滅戦」

1937 (昭和12)年10月、陸軍航空本部から軍事極秘として「航空部隊用法」が出されました。これは

1928（昭和3）年の「統帥綱領」の航空版といふべきものだと思ふ直氏（元空将補）は指摘されています。地上作戦への協力や政略的な爆撃についても言及はしているものの、やはり敵航空勢力の撃滅こそが陸軍航空の目標なのだという姿勢が明確です。そこが艦隊決戦に参加して戦艦の弾着観測、敵艦への雷撃にこだわり、戦略爆撃にも努めようとする海軍航空とは異なつた路線でした。

■偵察機を重視する陸軍航空

陸軍航空隊には司令部偵察機、軍偵察機、直協偵察機という3種の偵察機がありました。どうも戦後の定説では、陸軍の情報軽視とか偵察への関心が薄かつたかのようなことが言われます。

しかし、その実態はといえば、「陸軍現用主要飛行機定義（昭和12年）」によれば、司令部偵察機は「航空高級指揮官戦闘指導ノ必要ナル搜索」

軍偵察機は「軍司令官ノ為ニ必要ナル搜索及指揮連絡」、直協偵察機は「第一線地上部隊ニ直接協働シ之ニ必要ナル搜索、指揮連絡及砲兵任務等」と示されています。

偵察機の系譜は、大正時代のフォール教官団がもたらしたサルムソン（乙

式1型）から始まりました。次に88式偵察機が707機も生産されました。続いて92式偵察機が230機、94式偵察機（軍偵察機の初代）が生産数不明ながら満洲、北支方面で活躍しています。



ノモンハンで偵察結果を元に鳩首する参謀と偵察将校・94式偵察機

続いて97式司令部偵察機が登場します。これは民間型が「神風号」として有名になりました。約500機が生産されました。飛行戦隊や独立飛行隊、独立飛行中隊、団司令部偵察中隊などで使われます。



陸軍航空戦隊97式司令部偵察機

92式偵察機の後継は98式直協偵察機があり約800機が生産され、94式は同じく99式軍偵察機が継承し、これも襲撃機型とあわせて1400機あまりも生産されました。



地上部隊と通信筒で連絡する98式直協偵察機



活躍した99式軍偵察機

何より有名なのは、「新司偵」という名称で親しまれた100式司偵です。その快速と優美なデザインで知られ、大東亜戦争初期にはビルマ・インド方面で敵戦闘機にも捕捉されず「空の通り魔」ともいわれたそうです。生産機数は各型合計で約17

00機といひます。



有名な独立飛行第18中隊の100式司令部偵察機、尾翼に虎のマークが描かれています



戦闘機部隊を誘導する100式司令部偵察機

有名な1式戦闘機「隼」は総生産数が約5700機、97式重爆撃機が同じく1700機、99式軽爆撃機は同2000機などと比べても決して少なくありません。「航空撃滅戦」には敵情視察が欠かせないということでしょう。今回は、海軍航空とのさまざまな比較をしてみたいと思います